

「かながわ人づくりコラボ2018」の実施結果の概要

1 開催の趣旨

かながわ教育ビジョン第6章に基づき、「かながわ人づくりコラボ」を開催する。

コラボ2018は、平成30年6月15日に策定された国の「第3期教育振興基本計画」を踏まえ、かながわ教育ビジョンについて県民の方々と共感と共有を図り、様々な主体との協働・連携による人づくりをより一層推進するとともに、実効性のある教育施策に資する。

2 開催の状況

- (1) 日時 平成30年11月3日（土・祝）13：30～16：10
- (2) 場所 横浜市西公会堂 講堂
- (3) テーマ 夢と可能性への挑戦 ～かなえる力を育む人づくり～
- (4) 参加者 319名

3 開催の内容

(1) 開会（神奈川県教育委員会 教育長 桐谷 次郎）

開会の挨拶として、「かながわ教育ビジョン」の理念に基づく「心ふれあう しなやかな 人づくり」の取組み、かながわ教育月間及び期間中に開催した「かながわ教育月間フォーラム」の取組み、県民との教育論議の機会である本コラボの趣旨とテーマ設定の視点などについて、話があった。

また、「ともに生きる社会かながわ憲章」の取組みについて、話があった。



(2) 基調講演「『はやぶさ』に夢を乗せて」

（宇宙航空研究開発機構（JAXA）名誉教授／はまぎんこども宇宙科学館 館長 的川 泰宣）

宇宙に係るプロジェクトに多く携わってきたが、本日は皆さんも聞き馴染みがあるだろう、私が携わった最後のミッション「はやぶさ」というものを軸にして話を進めていきたい。

この「はやぶさ」プロジェクトの始まりは、理学部の研究者たちの宇宙の始まりのことなどを「極めたい」という非常に強い気持ちがきっかけとなっている。そして、彼らの好奇心を満たすための方法を工学部の研究者たちが具体的な計画として作成し、チームを作っていくことになった。

つまり、始まりのきっかけというのは、必ずいつも「夢」とか「好奇心」などを持っている人達から始まる。これは、宇宙事業に限ったことではなく、これからの若い人達が成長し、社会に出て様々なプロジェクトに取り組む中でも同じで、プロジェクトを始める人は、必ずそのようなタイプではないかと思っている。

プロジェクトの話に戻すと、始まりから約10年かけて計画等を具体化し、1995年に



宇宙開発委員会へ提案することになった。その提案の中には、技術的に8つの世界初の試みが含まれていたもので、当初は委員の方もあまり真剣な様子ではなかったものの、1995年というバブルが弾けた時期に若い世代が積極的な挑戦をするのは良いことだろうということで、全部ではなくとも一部でも実現できるよう、本格的な設計や開発が始まった。

そこで感じたことだが、きっかけとなった好奇心や夢を具体的な計画に作っていくという工程について、しかも、非常に挑戦的な形で進めていくという点は「極めたい」という気持ちとは違い、「挑みたい」という気持ちではないかと思う。実際に設計を完成させた推進力は、好奇心というより冒険心ではないかと思っている。



その後、完成した設計に基づき探査機を製作することとなるが、私たちは工場を持っているわけではないので、製作をメーカーに依頼するにはいけない。しかし、プロジェクトについての予算は本来の4分の1しかなかった。これは本当に大変なことで、大手のメーカーに依頼することが出来ず、自分たちで町工場や中小企業と交渉し、製作していくこととなった。結果的には、この工程のおかげで関係者間の共通認識や知識が十分に形成されたことが、「はやぶさ」の成功につながっていると考えている。

この製作の段階になると、夢や好奇心、冒険心は役に立たない。では、最後に実現させていくには何が重要かという点、依頼されたものを100%の完成度で「作りたい」という気持ちである「巧の心」が必要になる。

「はやぶさ」プロジェクトはここまで紹介した「極めたい」「挑みたい」「作りたい」という3つの心がスクラムを組んで作られたものだと思っている。この3つの心は、独立するのではなく、絡みあいながらひとつの全体を形成する。

そして、それぞれの心の持ち主というのは、誰かを助けるという気持ちではなく、自分の持ち場で懸命に取り組むこと。それは共通の目標を持ちながらも、そこに向かって自分のできることに精一杯取り組み、それが自分の人生を輝かせることになる。これがプロジェクトというものの本質だと思っている。そして、この異質な心の連携がチームワークを立派なものにしていく。これは、あらゆる仕事に共通するものだと思っている。

「はやぶさ」の話のまとめになるが、NHKの「クローズアップ現代」で取り上げられた際に「はやぶさが成功した原因をひとつの言葉で言えば何でしょうか？」という質問があった。これに当時は「適度な貧乏」と回答し、お金がなかったので、みんなで手分けして全国回ってクタクタになるまで体を使ったことがアイデアの引き出しを作り出してくれたと手短かに話をした。要するに、お金がなくても、「あきらめない心、力を合わせる心」というのが大事だと、これを「適度な貧乏」と表現した。



しかし、今は少々思い直して、それだけではないと考えている。本当に大事な事は「未来への高い志」であり、それを達成するために「適度な貧乏」を我々はどう活用するのかということに物事の本質があるのだと考えている。

最後になるが、宇宙開発については、これから新しい時代を始める時期にあると考えている。「始まる」のではなく「始める」。人間がポジティブに「始める」、もっと言えば、世界の若者たちが「始める」ということ。我々のような先達が考えたことに縛られることなく、自分たちの新しい概念で挑戦をしてもらえればいいと思っている。

日本は島国であるが、それは小さな島で人々がどうすれば幸せに暮らせるかという知恵を真剣に考えてきたということでもある。グローバルリズムに遅れているという考え方もあるが、今まで積み重ねてきた日本にしかないものや考え方が多くある。そういうものを生かす形で世界に貢献する、そして宇宙を活躍の舞台として生きることが、今大事な時代になってきていると考えている。

(3) 実践紹介と教育論議

ア 横須賀市の小学校・中学校の英語教育の取組み

①実践紹介（横須賀市教育委員会 主査指導主事 萩原 淳一）

横須賀市の小・中学校における英語教育について、そのめざす姿に向けて、市教育委員会としてどのような取組みを行っているのか、横須賀市立諏訪小学校、田戸小学校、常葉中学校の3校を具体例とし、実際の授業風景の撮影映像等を交え、発表を行った。



②教育論議

「夢と可能性への挑戦～かなえる力を育む人づくり～」をテーマに、具体的な提案や解決の方策について、パネリストの課題提起や、会場からの意見等により、「小・中学校での英語教育における現状と期待」という視点で教育論議が行われた。

(主な意見)

- 外国語を使ったコミュニケーションとは言葉や文化の違う人達と心を通わせることであり、そのためには、相手への配慮や相手意識が必要であるとともに、相手を意識することで自分自身への理解も進むのではないかと考えている。
- 日本語があまり得意でない外国につながりがある児童・生徒も楽しそうに生活している。そういった子が積極的に日本の子に話しかける様子や遊びに誘う様子を見ながら、英語そのものというより、積極性や言語が通じなくても人と意思疎通しようという気持ちを育ててほしいと思う。
- 今後、ますます英語というものが様々な分野で必要になっていくことが予想される中、共通語としての英語を学ぶことで、自分を海外に発信していくことや、職業選択の幅も広がるように思う。



- ・ 外国語教育の目的は、文部科学省も言っているが、その知識・技能の習得が直接的な目的ではない。外国語の学習を通じてコミュニケーションする力を養うことが重要である。コミュニケーションとは何かを、英語を通じて考えているという点が、横須賀市の英語教育の特徴だと考えている。
- ・ 横須賀市の英語教育の取組みをどのように市内だけでなく、県全体へ普及させ、県全体で英語教育についての課題意識等を共有していくかが今後の課題ではないかと感じている。

(今後に向けて)

これからの子どもたちが生きていく社会では、多様な他者と協働していくことがますます重要になっていく。そうした時代の中では、他者を受け入れつつも、確かな自己を基盤に生きていくことが出来る、しなやかな人づくりが必要となる。

そのためにも、幼少期から日本語以外の言語に触れることは、言葉の持つ豊かさや日本とは異なる文化を知るとともに、自分のアイデンティティの根幹をなす自国の文化や言葉を顧みる良い機会にもなるので、県内全体で横須賀市のような取組みが広まっていくことに期待したい。

イ 県立上矢部高等学校美術科の取組み

①実践紹介（県立上矢部高等学校 教頭 甲斐 秀幸、生徒一同）

上矢部高校の美術科の全体概要、美術科の選択科目である「クラフトデザイン」の概要や実際の取組紹介、授業の中で生徒が製作した制服のプレゼンテーションなど、授業風景の写真や撮影映像、製作物そのものも交え、発表を行った。



②教育論議

「夢と可能性への挑戦～かなえる力を育む人づくり～」をテーマに、具体的な提案や解決の方策について、パネリストの課題提起や、会場からの意見等により、「県立高校での専門学科教育など、多様な学びにおける現状と期待」という視点で教育論議が行われた。

(主な意見)

- ・ 企業と連携した上矢部高校の取組みは、将来、仕事をする際に課されるようなリアルな条件の中での活動になり、生徒の皆様にとって非常に素晴らしい体験になったと思っている。
- ・ 今回の学習指導要領の改訂においては、小学校段階から将来を見据えたキャリア教育の積極的な推進が



示されているが、実際の高校進学率では、約70%が普通科で専門学科は約20%程度の進学率となっており、高校進学で進路をある程度決めて進学するのは難しいように思われる。



- 普通科であっても、力をいれている分野の違いなどから特色のある普通科は存在するので、将来を見据えて、普通科を選択するという考え方もある。
- 幼少期にガールスカウトで様々な体験をし、その中で一番楽しかったのが美術だった。それが最初のきっかけとなり、美術の専門学科に進学した。
- 専門学科というと、専門的で授業についていけないかわからないという不安を聞くことがある。そういった不安を払拭するためにも、各学校でも積極的な情報発信をしていく必要があると感じている。
- 美術科に進学したが、進学した後で美術に興味を失ってしまった時期がある。その時は、音楽という別の分野に打ち込んでいたが、学校の課題であらためて美術に真剣に向き合った際に、音楽も含め、今まで打ち込んできた様々な経験から、新しい分野に挑戦するきっかけを得られたように思う。

(今後の方向性)

今、神奈川県では県立高校改革を進めており、そのコンセプトとして「生徒の学びと成長にとって何が重要かという視点を最優先にする(スチューデント・ファースト)」という基本的な考え方に立って、様々な取り組みを進めている。その中で、個性や能力を生かすことが出来る質の高い教育の推進をめざすとともに、児童・生徒の多様な進路・可能性に対応するべく、専門学科の改編を進めていく。



そうした中で、神奈川県には多くの選択肢があり、その分野での専門性を伸ばしてみたい方は積極的に挑戦してほしい。そして、最後になるが、児童・生徒に多様な経験をさせるということは学校教育の中だけでは難しい面もあるので、民間企業の皆様など、様々な方の力を借りながら進めていくことに期待したい。

(4) 閉会(かながわ人づくり推進ネットワーク 幹事長 内藤 昌孝)

閉会のことばとして、基調講演では、的川氏から、異質な心のチームワーク、想定外への想定、あきらめない心、未来への高い志の重要性など、様々な示唆をいただいたこと。その後の実践紹介と教育論議では、短い時間であったが、高校生、大学生にも論議に参加いただき、充実した発表と意見交換であったこと。本日のコラボを契機として、子どもたちが夢や可能性へ挑戦し、それをかなえられる力を育めるよう、地域・家庭・学校が一層密に連携していく必要があることなどについて、話があった。

